

女子の生徒文化の特質

武 内 清

1. はじめに

学歴をめぐる論議は、男子に対して十分当てはまっても、女子に関しては妥当しない部分も多い。暗黙のうちに、男子中心の学歴論議が展開されているのである。同様に、生徒文化をめぐる論議も、男子中心の論議であることを否認しない。業績本位の社会においては、それを受容する勉強志向の下位文化と、それを拒否する反抗文化の二極分化がおこる（ハーグリーブス）⁽¹⁾。あるいは、生徒たちは運動競技に熱中し勉強のよくできることは高く評価されない（コールマン）⁽²⁾、ストリートカルチャーとポップメディアカルチャーの分化がみられる（マードック）⁽³⁾、生徒たちの反学校文化を支えるのは労働階級の文化である（ウイルス）⁽⁴⁾といった生徒文化の特質も、男子中心の知見であり、女子に特有の行動原理や心情は十分に考慮されていない⁽⁵⁾。

これは、これまでの学校や社会の仕組みを男子が中心につくってきた長い歴史があり、また今日の学校教育が子どもたちの性別によって、教育の目標や内容あるいは方法を違えることをほとんどしていないことにもよっている。

生徒の行動様式や価値観の形成を学校教育との関連でみていくのが、生徒文化的視点であり⁽⁶⁾、学校教育が性による違いをつけないように配慮している以上、それへの反応としての生徒文化も、性差をあまり意識しない方向へ進んで当然といえ当然である。

しかし、学校がその教育理念にもとづき、性による違いを極力排する努力をしても、生徒の性による思考や行動の違いや、親や教師の期待（男の子と女の子に対して期待するものがかなり違う）がおのずと違った反応を生徒たちにもたらし、男子と女子の生徒文化の特質にかなりの違いを生じさせていることも確かである。

本稿では、小中高の生徒を対象にこれまでになされたいくつかの調査データを性差という観点から検討し、女子の生徒文化の特質を明らかにしたい。

武 蔵 大 学

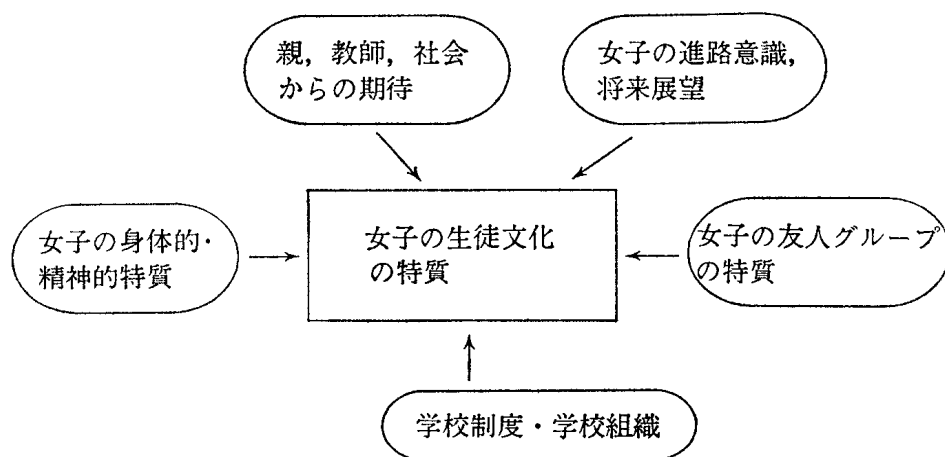


図 1 女子の生徒文化の規定要因

おおよそ、図1のような分析図式を考える。女子の生徒文化の特質を中心に置き、それを規定する要因として、①女子の身体的・精神的特質、②親、教師、社会からの期待、③女子の進路意識、将来展望、④女子の友人グループの特徴、⑤学校制度・学校組織の5つを考える。

2. 女子の身体的、精神的特質

作田啓一は、M. ウェバーの行為の類型を参考に、人間の行為の3類型を示している。利害あるいは損得の категорияに依拠して行われる目的合理的行為、正邪ないし善悪の categoriaに依拠して行われる価値合理的行為、好き嫌いの categoriaに依拠して行われる感情的行為の3つである。この3類型でいえば、本質的に自然や生命と結びついている存在である女子は、男子に比べ第3の感情的行為が多いと考えられる。

人間の好き嫌いは移ろいやすく、同じパターンで頻繁に繰り返される出来事を対象にする社会科学の対象になりにくい。しかし、それにもかかわらず、好き嫌いということは社会現象であるし、人間の行為の多くが感情にもとづくものである以上、それを分析する方法を考えるべきであると、作田啓一は提言している。そしてそれは究極のところ人間の生命のリズムと関係があるとしている⁽⁷⁾。

女子の児童・生徒は男子に比べ、その時々好き嫌いの感情によって行為を選択していく比率が高いとすると、それ以外の行為は女子に相対的に少なくなる。

つまり、高い目標を設定し、その目標に向けて欲求充足を延期し日夜努力する勉強型 (Academic subculture) やその対極の反学校的な逸脱型 (Delinquent subculture) は女子生徒に少ない。また、自分の信念や正邪の categoriaに依拠して行われる行動 (クラブ活動や生徒会活動、HR活動等) の比率 (とりわけそれに打ち込むタイプ) は、女子に少ないと考えられる。女子の低い四年制大学進学率や、運動部に熱心な生

徒や反抗的行動をとる生徒が少ないのも、上記の例証となる。具体的データの検証は後に行う。

3. 親、教師、社会からの期待

東京都子ども基本調査（対象小3、小5、中2とその母親）でみると、「男と女は生まれながらにして違うのだから、男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てた方がよい」と考える母親は、昭和52年の36%から昭和58年の30%へと多少減少し、「男と女の違いよりも、ひとりひとりの違いに応じて育てた方がよい」という個性尊重派が58%から68%へと増加している。そして個性尊重派の回答は、高学歴の母親に多い（大学卒83%、短大卒68%、高卒67%、中卒64%）⁽⁸⁾。

しかし、この回答はタテマエ的であり、実際の母親のしつけや子どもへの期待には、性による違いが大きくある。

「子どもが自分で食事を作れるように教える」（女の子に対し59%、男の子に対し44%）、「進学に有利な高校に進ませたい」（女の子に対し15%、男の子に対し25%）、「4年制大学まで進ませたい」（女の子に対し37%、男の子に対し68%）。お母さんは「勉強しなさいとうるさくいう」（女子35%、男子47%）、「言葉づかいについてうるさくいう」（女子62%、男子48%）、お父さんは「勉強しなさいとうるさくいう」（女子20%、男子27%）、「言葉づかいについてうるさい」（女子37%、男子34%）、「欲しいものをすぐ買ってくれる」（女子31%、男子20%）。

親は男の子に対しては、勉強についてやかましく言い、進学に有利な高校に進ませ、高い学歴をつけさせたいと考え、女の子に対しては、普通の高校に進ませ、勉強より言葉づかいや礼儀作法に気を遣い、高い学歴を必ずしも望まない。

学歴獲得競争の中で「親の設定したルールの上をやみくもに走って疲れの見える男子に比較して、今の女子の方が生き生きとしてバイタリティーに富んでいるように見える」⁽⁹⁾ というのは、このような親の期待の違いにもよっている。

教師も親と同様に、女子の進路に関しては男子に対するのと違った期待を持っている。大学に行って公認会計士になりたいあるいは画家になりたいという女子生徒から相談を持ちかけられた一人の高校教師は、「女性が真の生き甲斐をうるためには職業的自立が必要である」という考えを持ちながら、アドバイスをためらっている気持ちを次のように述べている。

〈彼女らがもし男性であったら、私はあまり躊躇^{ちゅうちょ}しないで本人の意向に賛成したかもしれない。私があれこれと思い悩んだのは、女性はやがて結婚して家庭に入るのだから、何も好んで厳しい世界に飛び込むことはないのではないか、という潜在意識が心の中にあったからであろうか〉⁽¹⁰⁾

4. 女子の進路意識，将来展望

東京大学合格者中に占める女子の割合は，昭和41年の4%から昭和59年の8%へと年々増加している。しかしその割合は男子の十分の一にも満たない。同様に入学偏差値の高い男女共学大学に占める女子の比率は一様に低い⁽¹¹⁾。これだけ能力差，学力差が男子と女子の間にあるとは考えられない。存在するのは社会的に形成されたアスピレーション（野心）の性差である。

女子の進路意識，将来展望が男子のそれと比べてきわめて低いというデータが多く報告されている。

図2は，東京都子ども基本調査のデータで進路希望を性・学年別にみたものである⁽¹²⁾。小3では大きな性差のなかった進路希望が，小5，中2となるにつれて大きく分化していく。男子の場合は，学年の進行とともに高校以下が減少し，4年制大学進学希望が増加する。女子の場合は学年の進行とともに高校以下の割合は大きく変化しないが，4年制大学進学希望が減少し，短大志望が増加する。職業人としてより短期就業一主婦という伝統的な女性役割にそった選択が現実的になされているのである。

表1は，高校生に努力すればどの程度のことかと思えるかを尋ねたものである。アスピレーション（野心）が，男子と比べ女子においてきわめて低いことがわかる⁽¹³⁾。

中学生についても同様の傾向が示され，その心理について，深谷和子らは次のようにコメントしている⁽¹⁴⁾。

くある割合の女の子たちは，いつの時期からか，男の子たちと大きく違った目標，違った達成を志すようになり，精神的に，男の子と肩を並べるのをやめてしまう。自分の前にあるのは，社会的職業的達成ではなく，主婦であり母となることなのだ，と

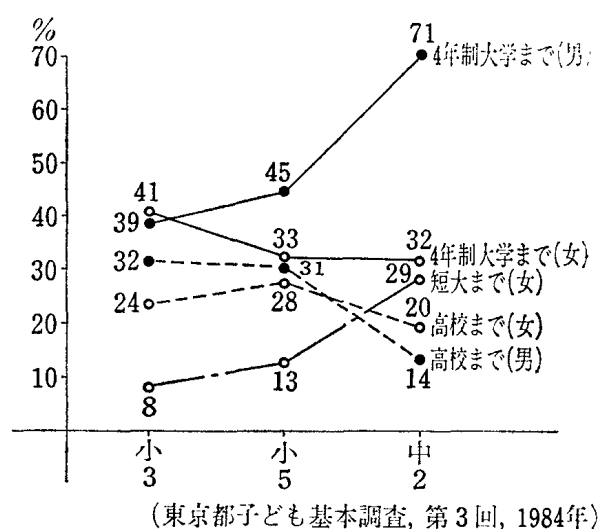


図2 進路希望の分化×性・学年

表 1 高校生の将来像の性差

(数学は、「必ずできる」+「多分できる」のパーセント)

	男 子	女 子	差(男子-女子)
一流大学に入る	50	26	24
学者・研究者になる	36	16	20
中央官庁(上級)に入る	35	16	19
学年で10番以内の成績に入る	48	30	18
大企業に就職する	55	42	13
政治家になる	17	4	13
お金持ちになる	25	15	10
自分の店を持つ	63	58	5
有名なタレントになる	17	12	5
恋愛結婚をする	85	81	4
趣味にあったくらしをする	81	84	- 3
芸術(文学, 音楽, 美術)関係の仕事につく	31	43	-12

(モノグラフ高校生 Vol. 2, 1980年)

思いはじめた時から、学校や教師や、勉強の意味は、それまでと微妙にちがう色あいで、彼女たちの目に映るのではなからうか。ガリ勉をして、男の子たちの敵になるよりも、ちょっとドジでかわいい女の子になって、男の子たちに支持される方がいい、という気持ちが生まれてくるのではなからうか。

以上のように、女子は親や教師あるいは異性からの期待に答える形で、伝統的な女性役割の遵守に向かい、アスピレーション(野心)の低下を起こしている。しかしこれらの結果をもって、女子のアスピレーションが低いと断定するのは危険であろう。これらは男性中心の社会の立場からのアスピレーションの高低だからである。「芸術関係の仕事につく」「余暇時間を多く持つ」「好きなスポーツをする」「楽しみのための旅行をする」「子どもと多くの時間を過ごす」といった女性特有のあるいは余暇の視点からアスピレーションの高低をはかったら女性は俄然優位に立つ。男性は煽てられて高い野心を持ちワークホリックに陥り、人生の楽しみの多くを女性に奪われていると考えられないこともない。

5. 女子の友人グループの特徴

女子高校生の96%が、ふだんよくつきあっている仲のよい友人グループを持っていると答えている(男子高校生のその割合は90%)。

友人グループに入れず、学校をやめていく女子生徒もいる。その友人グループの人数は、4～5人ないし8～10人が多く、平均は6人である。メンバーの中に異性を含

まれる割合は1割で、ほとんどが同性だけのグループである⁽¹⁵⁾。

現代の生徒たちにとって、同性の友人グループからの影響はきわめて大きい。女子の友人グループの特徴を男子と比較して明らかにしてみよう。

まず、友人グループの構成メンバーであるが、女子のグループの特徴として、「メンバーは全員同じクラス」(女子36%, 男子20%)「メンバーはいつも決まっている」(女子88%, 男子79%)が多く、「メンバーは部が同じ人が多い」(女子29%, 男子37%), 「メンバーの中に中学時代の友人が含まれている」(女子51%, 男子65%)は男子に比べ少ない。女子の方が現在の場をもとにした友人グループを形成しやすい。

友人グループでの話題は、女子は「ファッションのこと」(女子83%, 男子46%), 「テレビやタレントのこと」(女子79%, 男子68%), 「異性のこと」(女子70%, 男子63%), 「別の友だちから聞いた話」(女子87%, 男子75%)といったファッション, 芸能, うわさ話が多く、「勉強や入試のこと」(女子46%, 男子54%), 「政治・社会のこと」(女子6%, 男子19%), 「文学や哲学のこと」(女子11%, 男子15%)といった勉強や社会の話はあまりしない。

友人グループの機能として、自我の安定化機能と教育的意味の二つをあげることができる。「悩みごとの相談やまじめな話をすることがある」(女子89%, 男子58%), 「いっしょにしていると何となくほっとした気持ちになる」(女子89%, 男子74%)といった自我の安定化機能は女子において強い。「自分の欠点に気づかせてくれることがある」(女子85%, 男子73%), 「自分でもあのようになりたい人がある」(女子80%, 男子64%)という教育的意味も女子の方が高い。「一生つきあえる友人がいる」の割合も女子79%, 男子68%と女子の友情は男子より強い。

友人からどのような人間としてみられたいかを聞くと、「服装のセンスがよい」(女子80%, 男子58%), 「友だちづきあいがよい」(女子90%, 男子84%), 「ユーモアがある」(女子90%, 男子83%), 「自分を装ったりしない」(女子89%, 男子82%)と、男子以上につきあいを重視する風潮が女子にみられる。

一般的には女子の友情やつきあいは男同士のそれに比べ希薄と考えられがちだが、高校生の回答をみる限り、女子の仲間志向は男子以上に強い。後述する生徒のタイプ分け(類型)でもそれが確かめられる。

6. 男女共学・別学と異性関係

ここでは高校の男女共学・別学という学校制度の違いが女子の異性関係にどのような影響を与えているかを考察しよう⁽¹⁶⁾。その他の学校制度, 組織の影響の実証研究(性差を考慮したもの)はほとんど見られない。

ふだんよく話す異性のいる割合は、男子の場合共学で64%, 男子校で51%とわずかな差であるのに対し、女子では共学86%, 女子校47%と約2倍の差がある。また今交際している異性がいる割合は、男子の場合共学15%, 別学18%とほとんど差がないの

女子の生徒文化の特質

に対し、女子では共学33%、別学15%と約2倍の差となっている。このように、男子にとって異性との交際の機会は自分で切り開くべきものになっているのに対し、女子にとって学校制度の違い（共学か別学か）が、異性関係に与える影響の大きいことを示している。

つきあっている相手についてきくと、高校生同士のつきあいは共学女子に多い（87%）が、別学女子のその割合は52%と少なく、半数近くが2歳以上年上の男子（大学生や社会人）と交際していることになる。

女の子を女子校に入れると、異性とつきあう率は15%と確率的には少なく、親は安心だが、その15%のケースに入ると、親や教師の眼の届かないところでつきあいが進行して、親は安穩としていられない。それに対して共学校の女子で異性とつきあっている生徒は33%と多いが、そのつきあいは高校生同士の学校を通してのつきあいで、大人の眼も届き、親の心配はそれほどでもない。

よく話す異性の有無と成績との間には表2のような関連がある。共学女子では成績の上位の生徒が異性と話す機会が多いのに対し、別学女子では成績の中以下の生徒が異性と接する機会が多くなる。これは学校内に異性がいる場合と、学校外で異性と接する場合の違いであろう。

よく話す異性の有無とクラブ参加との間にも、同様の傾向がみられる。共学女子ではクラブに参加している生徒が異性と話す機会が多く、女子校では学校内のクラブに参加しない生徒が、学校不適応から校外で異性との交遊を求めるようになる。

このように、高校生にとって異性とのつきあいは共学校と別学校では違った意味を持っている。共学校では、成績もよくクラブにも熱心に参加する学校適応的な生徒が異性との交際も多くなるのに対し、別学校では、成績が悪くクラブにも参加しない学

表2 よく話す異性の有無（女子）

			い	る	い	な	い
成 績	共 学	成 績 上	94.1		5.9		
		// 中以下	83.0		15.1		
	別 学	成 績 上	34.8		56.5		
		// 中以下	54.0		45.2		
ク ラ ブ	共 学	ク ラ ブ 参 加	86.4		11.4		
		// 不参加	84.6		15.4		
	別 学	ク ラ ブ 参 加	41.9		56.2		
		// 不参加	53.9		39.9		

（高等学校における男女共学・別学に関する実証的研究，1983年）

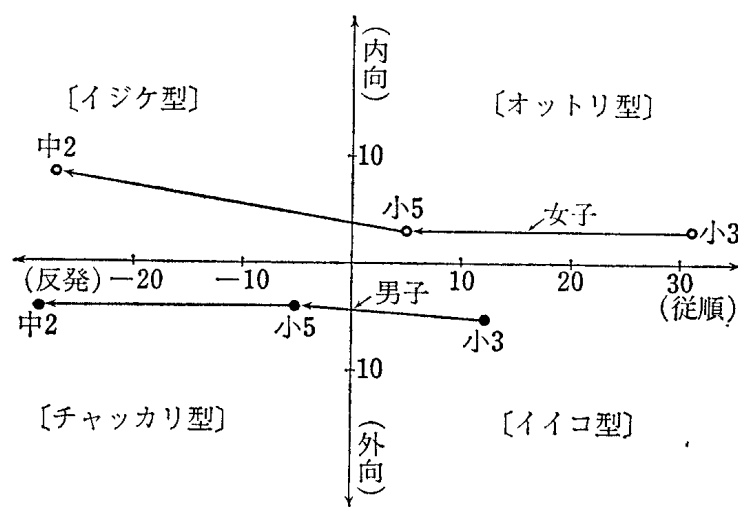
校不適応の生徒が、校外で異性との接触を求めるのである。共学校での異性交際は非行化につながる危険は少ないが、別学校の生徒の異性交際は、非行化の芽を十分持っているといえよう。

恋愛・結婚観についても、共学、別学で差が生じている。クラスメイトが結婚したということに対する評価をめぐって「温かく見守る」という恋愛・結婚に対する甘い評価は、共学女子35%に対し、別学女子で48%と多く、とりわけ別学女子で異性の友人のいないものはその回答が52%と、異性と隔離されているほど、恋愛・結婚に対し非現実的な夢をみる傾向があるといえよう。

7. 生徒文化のタイプと性差

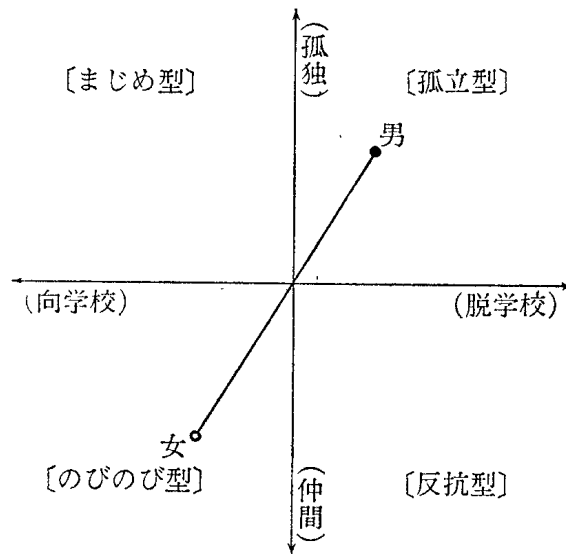
あらかじめ類型を設定するのではなく、回答の傾向から類似した回答群と回答者を集める林の数量化Ⅲ類の手法は、さまざまな批判もありながら⁽¹⁷⁾、全体的傾向を知る上で有効な方法である。この方法により、子どもたちの意識や行動を無意識に規定している価値観のパターンを明らかにすることができる。数量化Ⅲ類で得られた主な結果を性差という観点から検討し、女子生徒文化の特徴を明らかにしよう。

図3は、小3、小5、中2を対象にした東京都子ども基本調査（第3回）の状況設定型の質問の回答から、子どものタイプ分けを行ったものである⁽¹⁸⁾。「オットリ型」「イジケ型」「チャッカリ型」「イイコ型」の4タイプが、従順—反発、内向—外向という2つの軸によって識別されている。学年の上昇とともに、社会や大人の規範へ反発的な方向へ動いていく点は男女とも変わりがないが、男子は一貫して外向的であるのに対し、女子は一貫して内向的な傾向を示している。ここで内向的という意味は、「友だちと遊んでいても好きなテレビの時間がきたら帰る」（女子65%、男子58%）、「日曜日の遊びの誘い断る」（女子27%、男子24%）、「雨の山歩きいやだ」（女子55



(東京都子ども基本調査、第3回、1984年)

図3 小中学生のタイプ



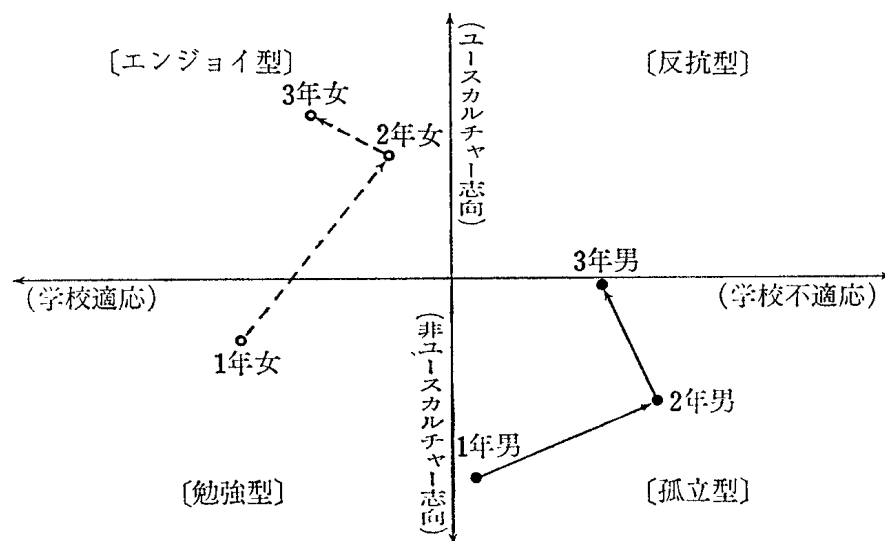
(中学生の進路意識と母親の教育観, 1979年)

図 4 中学3年生のタイプ

%, 男子50%), 「お母さんが見に来た時勉強のふりをする」(女子36%, 男子33%) という回答が示すように, 友だちや親, 社会, 自然に対して自分からすすんでかかわっていかうとしない消極的な態度や性向を意味する。これらの内向的態度は「女の子らしさ」として親や社会から期待され, 女子が自分の価値態度の一部として内面化しているものである。タイプでいえば, 男子は小3の「イイコ型」から小5, 中2にかけて「チャッカリ型」に移行するのに対し, 女子は小3, 小5の「オットリ型」から中2の「イジケ(反発・内向)」へ移行する。

図4は, 中学3年生を対象にした調査から中学生のタイプ分けを行ったものである⁽¹⁹⁾。「孤立型」「まじめ型」「のびのび型」「反抗型」という4タイプが, 向学校—脱学校と孤独—仲間志向という二つの軸によって識別されている。平均でみると, 男子は脱学校・孤独の「孤立型」になり, 女子は向学校・仲間志向の「のびのび型」となる。女子の方が学校適応的で仲間志向が強いという傾向は, 多くの調査で指摘されている。ここで女子に多い「のびのび型」というのは「学校内に親友を持ち」(女子73%, 男子51%), 「部活動に参加し」, 「好きな先生がいて」(女子32%, 男子27%) 学校生活を楽しいと感じるタイプである。

さらに図5は, 高校1～3年生を対象にした調査から, 高校生のタイプ分けを行ったものである⁽²⁰⁾。「反抗型」「エンジョイ型」「勉強型」「孤立型」の4タイプが, 学校適応—学校不適応とユースカルチャー志向と非ユースカルチャー志向という2つの軸によって識別されている。学年の上昇とともに男女ともユースカルチャー志向が増加しているが, その変容は男子より女子の方が急激である。ここでいうユースカルチャー志向とは音楽, 友人, 異性への親近性が大きい傾向である。一方, 学校適応度に関しても大きな性差があり, 「先生に質問する」(女子31%, 男子30%), 「この学校に

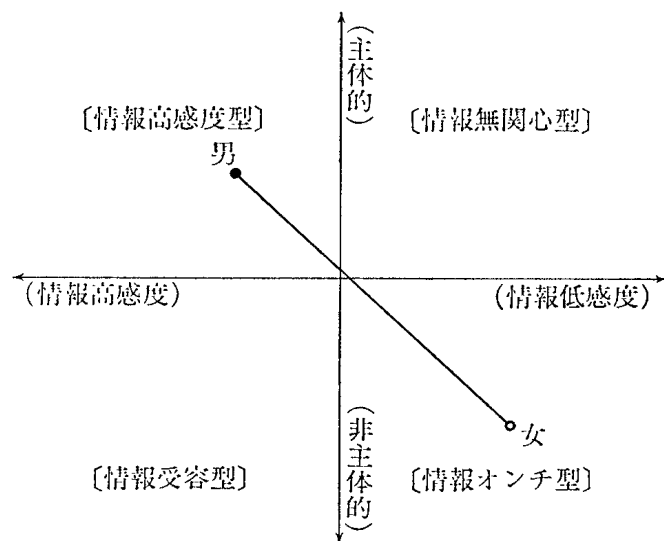


(モノグラフ高校生'80, Vol.2)

図 5 高校生のタイプ

誇り」(女子55%, 男子42%), 「勉強の計画をたてる」(女子69%, 男子56%), 「学校生活は楽しい」(女子87%, 男子76%), 「クラスの仕事をすすんで引き受ける」(女子28%, 男子22%)といった学校適応的な回答が女子に多くなっている。平均点でみると、中学生の時と同様に、男子は「孤立型」、女子は「エンジョイ型」を示す。女子は受験という圧力が男子ほど深刻でないせいと、置かれた状況への適応能力が男子よりすぐれていて、生活をエンジョイする傾向が強いといえよう。

しかし、女子は現状維持的で、新しい環境をつくり出し、主体的に活躍する能力を欠いているというデータもある。次にそれを見よう。



(モノグラフ高校生'85, Vol.15)

図 6 高校生の情報行動タイプ

女子の生徒文化の特質

図6は、高校1～3年生を対象に、高校生の情報行動に関するタイプ分けを行ったものである。「情報高感度型」「情報受容型」「情報無関心型」「情報オンチ型」の4タイプが、情報高感度—情報低感度、主体的—非主体的という2つの軸によって識別されている。情報集めが好きで（男子36%、女子31%）、本屋へよく行き（週2回以上、男子42%、女子26%）、週刊誌をよく読み、音質を気にし（男子31%、女子20%）、音楽テープを自分で編集する（男子33%、女子25%）、「情報高感度型」は男子に多く女子に少ない。女子は情報の受容や伝達能力はあっても、新しい情報への鋭敏な感度や主体的な情報処理能力では、男子にまだ劣っているのである⁽²¹⁾。

以上のように、これまでの生徒文化研究から得られたデータでみると、女子生徒は親や教師からの女の子らしさの役割期待を内面化し、内向的であるが、現状に対する適応力は強く、交遊を楽しみ、学校生活をエンジョイするタイプが優位となる。しかしこれからの情報化社会を生き抜くセンスや主体性があるかどうかという点と多少疑問視される。女子は情報の受容能力はあっても情報の収集と処理の能力ではまだ男子に劣る。これらは生来の能力差というより社会的期待の産物であり、女性の社会進出が増加する中で今後の動向が注目される⁽²²⁾。

〈注〉

- (1) D.H. Hargreaves, *Social Relations in a Secondary School*, Routledge & Kegan Paul, 1967.
- (2) J.S. Coleman, *The adolescent society*, New York; Free Press, 1961.
- (3) G. Murdock and G. Phelps, "Youth culture and the school revisited", *British Journal of Sociology*, Vol. 23, 1972, pp. 478—482.
- (4) P.E. Willis, *Learning to Labour*, Gower P.C. 1977. 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども—学校への反応、労働への順応』筑摩書房, 1985年。
- (5) これまでの生徒文化研究のレビューについては、武内清・荻谷剛彦・濱名陽子「学校社会学の動向」『教育社会学研究』第37集, 1982年, 東洋館出版社, 67—82頁, 耳塚寛明「学校組織と生徒文化・進路形成」同, 34—56頁, 白石義郎「学校文化と生徒文化」柴野昌山編『教育社会学を学ぶ人のために』世界思想社, 1985年, 128—144頁。
- (6) 拙稿「学校と生徒文化—米, 英, 日本の比較を中心に—」『海外教育研究3』1977年, 学事出版, 34—43項。
- (7) 作田啓一「好き嫌いの社会学」『思想の科学』No. 123, 思想の科学社, 1980年, 89—99頁。
- (8) 武内清・門脇厚司・望月厚司・西田知佳子・久慈洋子・飯田浩子・林芳樹・樋田大二郎・濱名陽子『大都市における児童・生徒の生活・価値観に関する調査』（第3回東京都子ども基本調査報告書）, 東京都生活文化局, 1984年。
- (9) 「特集, 女の子はいま, 視点」『青年心理』44, 金子書房, 1980年, 1頁。
- (10) 古屋雄伍「進路指導における女子への対応」『高校教育展望』7月号, 小学館, 1981年, 62—66頁。
- (11) 天野正子「新制大学35年と女子学生」『IDE・現代の高等教育』No. 259, 民主

- 教育協会， 5—15頁。
- (12) 前掲報告書， 245頁。
 - (13) 武内清・耳塚寛明・荻谷剛彦・樋田大二郎『モノグラフ・高校生 '80 Vol. 2, 高校生の生徒文化』福武書店， 1980年（サンプル10校， 3, 458名）。
 - (14) 深谷和子・横井富美子『モノグラフ・中学生の世界 Vol. 8, 女子中学生』福武書店， 1981年， 2頁。
 - (15) 武内清・耳塚寛明・樋田大二郎・荻谷剛彦『モノグラフ・高校生 '82 Vol. 5, 高校生の校外生活と価値観』福武書店， 1982年（サンプル10校， 2, 497名）。
 - (16) 拙稿「高等学校における男女共学・別学に関する実証的研究」武蔵大学人文学会雑誌15巻2号， 1983年， 71—82頁（サンプル6校， 543名）。
 - (17) たとえば， 山村賢明「教育社会学の研究方法」柴野昌山編『教育社会学を学ぶ人のために』世界思想社， 1985年， 52頁。
 - (18) 前掲報告書， 1984年， 15—36頁。
 - (19) 耳塚寛明「中学生の生徒文化の類型」東京大学教育社会学研究室『中学生の進路意識と母親の教育観』1979年， 43—61頁。
 - (20) 武内清他前掲報告書， 1980年， 85—101頁。
 - (21) 武内清・明石要一・穂坂明德・田中雅文・小沼克年・相馬久子『モノグラフ・高校生 '85 Vol. 15, 高校生と情報行動』福武書店， 1985年， 63—73頁（サンプル10校， 2, 169名）。しかしこれも男子優位の視点といえなくもない。
 - (22) 本稿は， 女子の生徒文化のタイプ分けとその規定要因のレビューに終始した。もっと重要な視点も残されている。たとえば女子生徒が教師や学校へ適応していくのにどのようなストラテジー（strategy）を用いるのか， 女らしさへの役割期待や男の教師の女子生徒に対する甘さをどう利用し本来の目的を達していくかという相互作用次元。さらには生徒文化を行動や価値の次元ではなく狭義の文化次元でとらえる方法など， 残された課題は多い。

In this sense “Japanese groupism” which is another key concept for understanding Japanese should not be viewed in terms of motherhood principle or significance of mother. Groupism has been consistently the norm which orients and coordinates Japanese activities as “public.” As the consequence of disorganization of IE and DOZOKU, IE was confined in “private” sphere of family, which supports its member’s activities outside of the family, which supports its member’s activities outside of the family, that is “public.” It was in such situations that mother-child relation surfaced and the mother assumed motivational meaning for Japanese.

The Characteristics of Girls, Student Subculture

Kiyoshi Takeuchi

(Musashi University)

The characteristics of girls’ student subculture quite differ from those of boys’.

Academic and delinquent subcultures are more dominant among boys, while girls are much involved in fun subculture.

The girls’ subculture seems to be influenced mainly by five factors.

Those are——

- 1) girls’ physical and mental nature.
- 2) conformity to parents’ and teachers’ expectation of “being feminine.”
- 3) patterns of girls’ peer friendship.
- 4) girls’ career orientation.
- 5) school organization.

By committing themselves to a specific subculture that is affected by five factors mentioned above, girls form their own specific value pattern and attitude.

Women’s Use of Time

Michinori Hirata

(Tokyo Institute of Technology)

This article attempts to examine the everyday life of women reflected in the